



マツカレハの
幼虫を食うムクドリ

ヒトのための自然が 自然の中のヒトか

自然のバランスをくずすもの

おたがいに助け合うことを「持ちつ持たれつ」といいますが、これは、動物、植物を問わず、すべての生物に長いあいだ保たれてきた自然の原則です。ところが、この自然のバランスをヒトがくずしているとしたら——たとえば、いろいろな草や木、野鳥や虫でバランスのとれていた雑木林を切りはらって松だけを植えると、トリが住めなくなるだけでなく、虫もいなくなる。つまり、松だけが栄えて、バランスがくずれるのです。すると自然は、この持ちつ持たれつを回復するためにマツカレハなどの害虫をふやします。害虫の大発生——それは自然界がバランスをとりもどすための手段だということができるでしょう。

自然は、けっして松がきらいなのではなく、マツカレハが好きなものでもありません。ただ、バランスを求めているだけなのです。だから、マツカレハがふえてくると、こんどはそれを殺す寄生虫や小鳥など、いわゆる天敵をふやします。天敵がふえるためには、草や実のなる木も必要で、こうして自然は、松の植林地を「松を主体とした第二のバランス」を持つ環境につくりかえるはずなのです。

けれどもヒトは、雑草を刈り、薬をまく——これが天敵のふえるのをさまたげ、害虫はなかなか減りません。

トリもヒトも 自然界の一員

ヒトが住むのは、自然の中、です。大都会をつくり、自然を征服したと思っても、それは地球上の一点にバクテリアがうごめいているようなもので、自然界から抜け出すことはできません。ヒトは、街をつくっても、田畑をつくっても、つねに自然の原則に従って植物↓それを食うシムリケモノ↓それを食う別のシムリケモノなどを、ほどよく住めるようにしてやるべきではないでしょうか。これが、有益なトリやケモノを保護すること、自然界における意義であり、ヒトが繁栄するための基本的な条件です。薬をまいて、一時は害虫を制圧したと思っても、やがてヒト自身が薬の毒性におかされる——これはまさしく、自然の理にそむいた公害の現実です。

別な見方をすれば、自然界は、ふえすぎたヒトを公害によって減らし、自然のバランスを回復しようとしているともいえます。ヒトは、かしこいはずのヒトは、そうなる前に自然の原則をふまへ、自然界の一員としての「共存共栄」をはかべきではないでしょうか。——たかトリ一羽、その盛衰が、深いところまでヒトと関わり合っていることを知っていただきたいのです。



ヒトの心の中に、
トリの保護区

法人団 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告、サントリー株式会社から日本鳥類保護連盟へ提供されたもので、サントリー株式会社からシリアルズとして送られるものではありません。